

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 黄善英

黄善英氏の「「童心」の思想と詩法―日韓近代の童謡運動」は、1910年代後半にはじまる日本の童謡運動と、1920年代前半にはじまる朝鮮の童謡運動との関わりを、子ども及び「童心」に関する考え方、実作にみられる傾向等を明らかにしつつ論じた、日韓比較文学研究である。

日本における童謡運動は、1918年に鈴木三重吉によって創刊された『赤い鳥』を中心に活躍した北原白秋や西條八十、『金の船』（のちに『金の星』）に拠った野口雨情らが先導したが、これに大きな刺激を受けるかたちで、1923年に<sup>バンジョンファン</sup>方定煥が雑誌『オリニ』（「子ども」の意）を創刊し、朝鮮における童謡運動を開始した。日本における童謡運動が、白秋にみられるように近代詩史上の重要な仕事であったように、朝鮮においても詩人<sup>チョンジョン</sup>鄭芝溶による童謡に結実するなど、大きな成果を挙げた。黄氏の論文は、これまで所謂児童文学の範疇において論じられることの多かった童謡を、広く近代詩の文脈に置き換えて論じたところにも特色がある。

本論文は三章に分かれる。以下、論文の構成にしたがって内容の概略を記す。

第一章では、まず東京において方定煥を中心に結成されたセクドン会による「少年運動」と、会のメンバーによる『オリニ』の活動が記述される。その上で、方定煥の子ども観を表す「童心中心主義」が、当時日本において小川未明や北原白秋によって盛んに論じられた「童心」観に強く方向づけられていたことが明らかにされる。また、日本における「童心」観にワーズワースの影響の痕が顕著であり、同じ文脈のなかで相馬御風による良寛像が成立していることが論じられる。さらに高木敏雄の『童話の研究』にも依拠する方定煥の「児童性」をめぐる議論に、すぐれて倫理的な主張と被植民地支配の現実をめぐる認識が込められていることが確認される。

第二章では、はじめに日韓双方における「童謡」の成立の歴史的な文脈が確認されたあと、『オリニ』誌上に掲載された「模作」童謡六篇が紹介され、その内容が詳しく検討される。模作の対象となったのは、西條八十による都会的雰囲気とエキゾティシズムを湛えた童謡が主であったが、模作の結果生まれたテキストには悲しみの要素が強くなっている。これは被植民地支配の現実を悲しみを通じて表現するという政治的啓蒙性を帯びる点で、芸術性に傾斜する日本の童謡と対照をなす。一方『オリニ』誌上で発表された童謡論に於いては、八十よりも野口雨情の影響が顕著であると確認されるが、これも教育の側面を重視した雨情の童謡観が、独立運動を視野に入れていた『オリニ』関係者には訴える力を持ったためであろうと説明される。

第三章では、日本の童謡運動において最も中心的な役割を担った北原白秋の童謡の詩法

が、白秋が主宰した雑誌『近代風景』から出発した鄭芝溶にどのような影響を及ぼしていると考えられるか、白秋の詩及び童謡と鄭芝溶の詩及び童謡のあいだにどのような類縁性があるかが論じられる。白秋の詩に顕著な感覚的表現について、印象派絵画との関連性が想定しうること、そこに伝統意識が強く表われていることが挙げられ、これらを軸に鄭芝溶の詩との比較が試みられる。

黄氏は、日本の童謡運動の影響下にあった朝鮮の童謡運動の記述にもとづき、文化の受容が受け入れる側の選択であるという側面を強く持つ、批評的表現行為であると主張するのである。

以上のように要約される黄氏の論文に対し、審査委員からは以下のような評価、批判が寄せられた。まず、1910年代後半以降の童謡運動を、日本と朝鮮双方を視野に入れてその影響関係を辿るといふ、これまで未開拓であった研究に手をつけ、「模作」童謡を発掘するなど、今後の日韓比較童謡研究の出発点を示した功績は大きい。さらに、童謡をあくまで詩として論ずる態度を一貫した点も高く評価しうるであろう。その一方で、『オリニ』の全貌が必ずしも捉えきれていない点、日本の童謡運動に関する記述により広い歴史的文脈への目配りが足りない点、韓国の児童文学、童謡研究に対する言及が不十分な点などが指摘された。また、第三章の叙述が、第一章及び第二章の叙述の流れと、やや切れてしまっている点も指摘された。

個々の記述への疑問等も、審査員からは提出された。また、雑誌『オリニ』に関する書誌的情報を十分に盛り込むべきであったこと、年表の必要性についても指摘があった。ただし、これらは小さな瑕疵というべきものであって、黄氏の挙げ得た功績を本質的に損なうものではない。

したがって、本審査委員会は、ここに黄善英氏に対し博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定することに、全員一致で合意した。